

(様式6)

件名：	史跡周防鑄銭司跡から新たな銭種「承和昌宝」銭と大型建物跡が発見されたことについて
担当課：	教育委員会 文化財保護課 埋蔵文化財担当 (電話：083-920-4111)

1. 発掘調査にいたる経緯

史跡周防鑄銭司跡の周辺で調査が進展したこと、山口大学から山口学研究プロジェクト「地域・行政・大学の協働による地方創生 ―古代テクノポリス山口の解明―」への調査協力の申し出があったことを契機として、平成28年度から、地域・行政・大学の協働による地方創生への取り組みとして「鑄銭司・陶地区文化財総合調査事業」を開始しました。

史跡周防鑄銭司跡は、昭和40年代に、史跡指定地面積のわずか5%程度しか発掘調査が行われていなかったため、その実態がよくわかっていませんでした。このことから、文化庁の補助事業を活用して、山口大学と協働で、平成29年度から発掘調査を行っています。山口大学と協働による発掘調査は今年度で4回目になります。

2. 調査体制

山口学研究プロジェクト代表 田中晋作教授 (山口大学人文学部)
山口市教育委員会文化財保護課

3. 調査経過

- ・ 第1次調査 期間：昭和40年8月20日～昭和41年3月20日
面積：422 m²
- ・ 第2次調査 期間：昭和47年2月24日～3月31日
面積：2,167 m²
- ・ 第3次調査 期間：平成29年8月28日～3月13日
面積：450 m²
- ・ 第4次調査 期間：平成30年8月28日～平成31年3月30日
面積：346 m²
- ・ 第5次調査 期間：令和元年8月26日～12月10日
面積：116 m²

4. 史跡周防鑄銭司跡第6次調査

現地調査期間：令和2年4月20日(月)～11月前半(予定)

調査面積：約310m²

調査費用：約650万円

調査目的：銭貨鑄造関連遺構の確認。第4次調査(平成30年度)で検出した大型柱穴によって構成される建物跡の確認。

- 調査成果：①銭貨を鑄造した炉跡と考えられる被熱遺構を検出。
②被熱遺構に伴う掘立柱建物跡を検出し、銭貨鑄造工房の一端が明らかとなった。
③大型建物跡を1棟検出。
④史跡南東部は、第1段階：銭貨鑄造工房、第2段階：工房以外の施設、に変化する可能性が高い。

5. 周防鑄銭司跡について

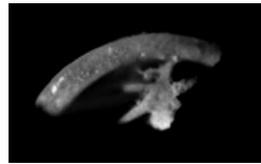
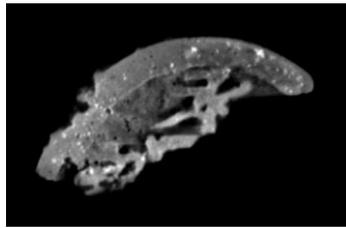
周防鑄銭司は、平安時代に設置された官営の銭貨鑄造所です。文献史料によれば、天長2年(825)に長門鑄銭司(使)の廃止を受けて設置され、その後11世紀初め頃まで、およそ200年間存続しました。多い時で80名を超える人々が年間1万1千貫文(1,100万枚)を目標として銭貨生産に携わり、いわゆる「皇朝十二銭」のうち8種類の銭貨を鑄造したとされています。

周防鑄銭司が稼動していた時期は、一時期を除いて「鑄銭司」は周防のみに設置されていました。平安時代の銭貨生産のほとんどを担っていた周防鑄銭司は、その存続期間の長さ、鑄造した銭種及び銭貨枚数の多さは他の「鑄銭司」と比べて卓越しており、その遺跡は日本史上貴重な遺跡といえます。

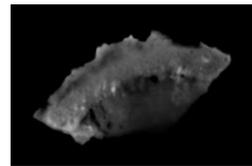
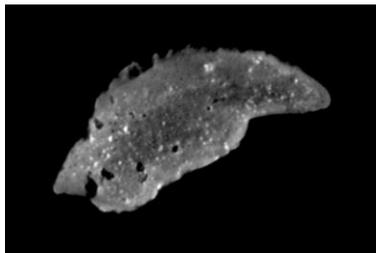
また、周防鑄銭司は、施設が移転したことを記す史料が残されていることから、鑄銭司地域から陶地域にかけて複数の場所に存在していた可能性が指摘されています。史跡指定地は、鑄造に使用された土製品が出土することで明治時代に知られるようになり、昭和40年度・46年度の2度にわたり部分的な発掘調査が行われた結果、昭和48年3月に約3万8千m²が国史跡に指定されました。



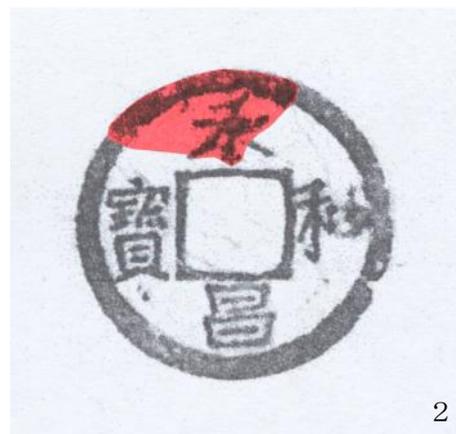
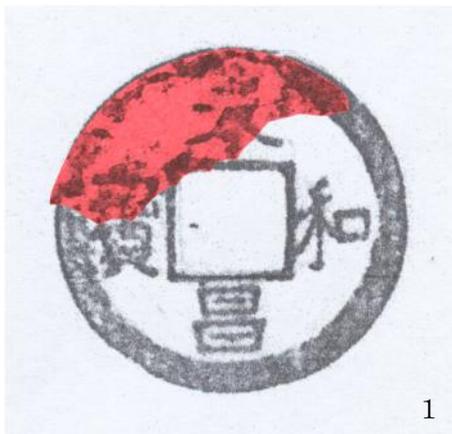
「承和昌宝」銭（第4次調査）



X線CT画像（銭文部分）（公益財団法人 元興寺文化財研究所）

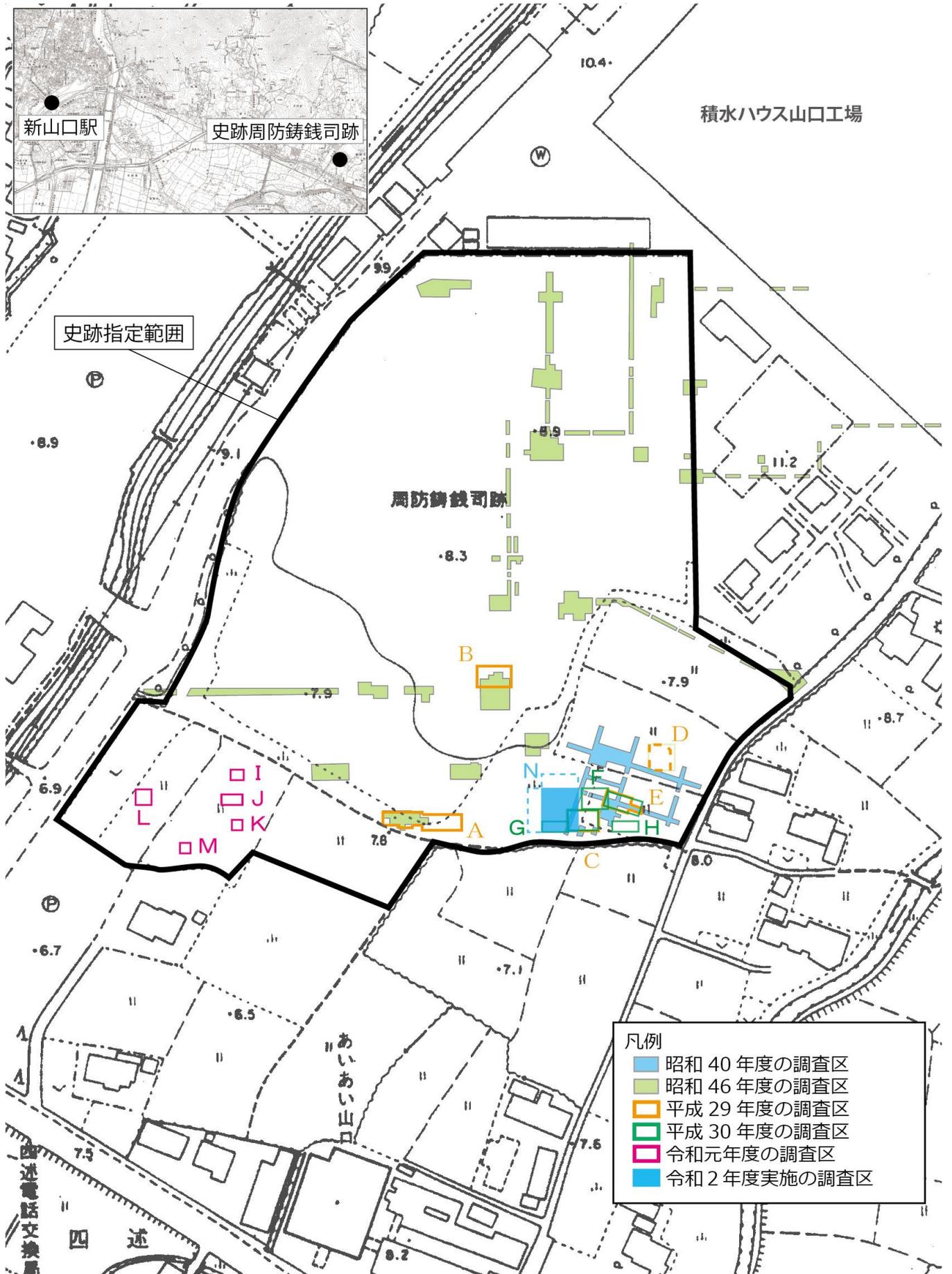


X線CT画像（鑄バリ部分）（公益財団法人 元興寺文化財研究所）

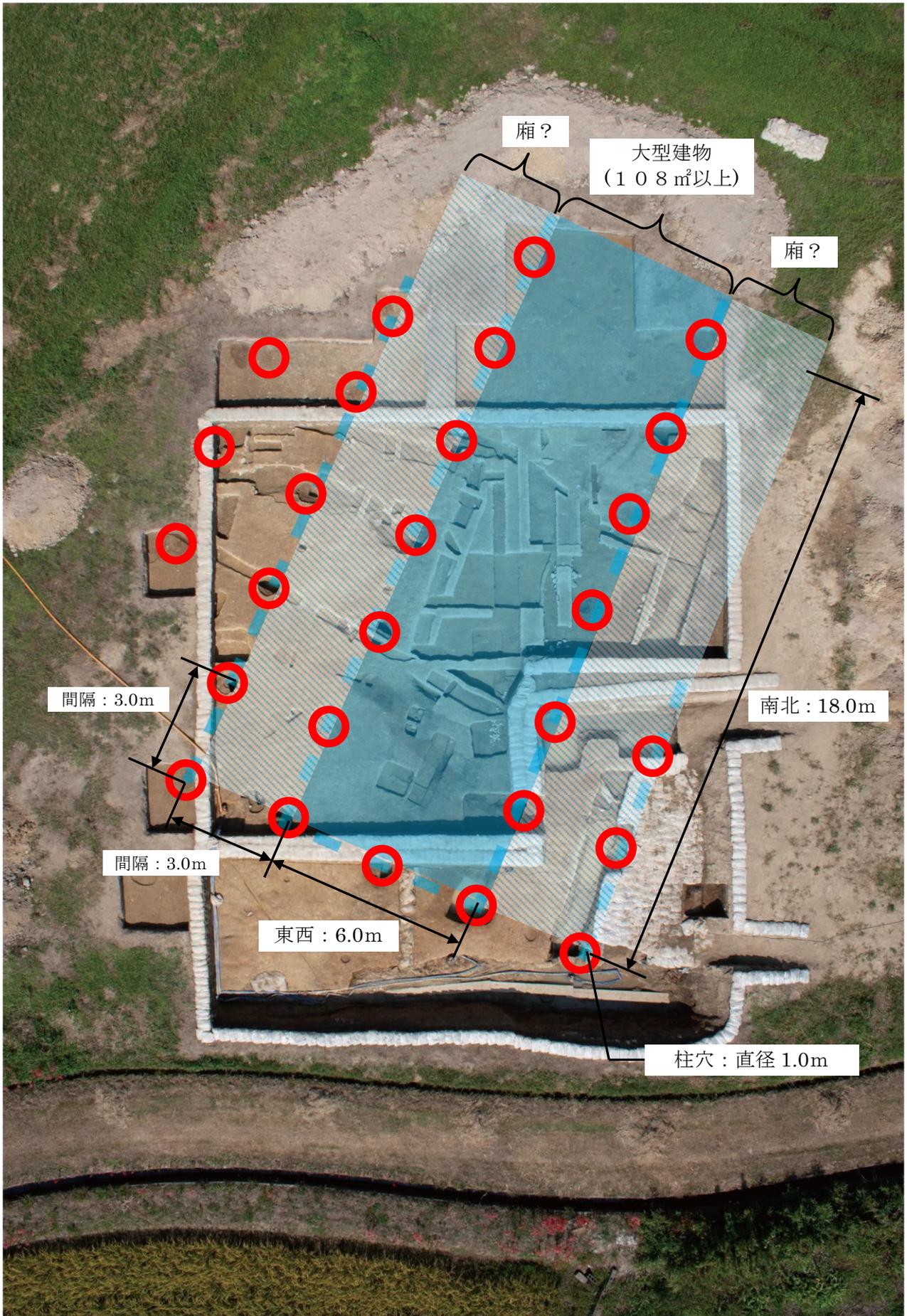


拓影でみた破片の部位（赤色部分）

※画像はすべて実寸大の約2倍



史跡周防鑄銭司跡第6次調査箇所 (S=1:2,000)



史跡周防鋳銭司跡第6次調査 空撮写真 (上が北)